

---

# 君が還る場所

大豆のススメ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
君が還る場所

【Nコード】  
N4826A

【作者名】  
大豆のススメ

【あらすじ】  
ある日公平は死んだはずの幼馴染、真美と出会う。戸惑いながらも、公平は真美と同じ時間を過ごしていく。

〜1〜

そのとき、僕は悲しいというより先に、納得していた。

だから真美は、僕たちの前から逃げるようにしていなくなっただんだって。

だから真美は、僕たちに何も言わなかったんだって。

きつと、それは僕たちにも真美にもどうすることも出来ないことだったんだ。

真美が死んだと知ったとき、僕は漠然とだけ死というものがなんなのか理解することができた。きつと、死というものはその人と僕たちとを切り離すための道具なんだ。

誰かが死んだら、その人とその人に関わった人たちは切り離される。だから、死んだ人は僕たちと同じ場所にとどまることはできない。死は、僕たちからも、そして死んだ人からもつながりを奪っていく。

真美とのつながりがなくなった。

そう感じたとき僕は初めて泣いた。

\* \* \* \*

「馬鹿ねえ、泣くことないじゃない」

「だって、真美……」

「大丈夫。私がいなくなつて、浩太には公平がいるわよ」

そう言つて真美は、少しはなれたところに立っている僕に視線を向けた。

「ね、公平」

「うん」

僕は悲しみを隠すのに必死で、つまらなそうに、そこに立っている演技をすることしかできなかった。

「私、もう行かなきゃ」

「待つてよ！ 真美がいなくなるなんて嫌だよ！」

浩太は聞き分けのない子供のように声を上げて泣き出した。僕も、浩太と同じ気持ちだった。

「私だつて」

真美はそう呟いて、下を向いた。しばらく無言でそうしていた真美は、不意に顔を上げると、浩太に抱きついた。背の低い浩太の顔は、真美の胸に埋まっていた。

「私だつて嫌だよ。ずっとここにいたい。浩太と、公平と、ずっと一緒にいたい」

「だったら！」

そつと浩太から体を離れた真美は、顔を背けて小さく声を出した。  
「駄目なの」

「どうしてだよ！」

「浩太」

僕の声に浩太は顔を上げた。涙でぐしょぐしょになった浩太の顔に目をやってから、僕は真美を見つめた。

「別に今生の別れてわけじゃないよ。今は辛いかもしれないけど、いつか、僕たちはまたいつしよになれる」

真美は顔を上げた。僕は、真美と目が合うと小さくうなずいてから、言った。

「そうだよね、真美」

「……うん」

真美も小さくうなずいた。そして、涙を拭いながら僕の前まで来ると、浩太にしたように、僕に抱きついた。

真美の腕が、僕の首筋に絡まって、きゅっと締まった。かすかな

圧迫感とぬくもりが、僕の全身を包み込んだ。

「お願い、公平」

僕の耳元で真美は呟いた。

「浩太のこと、ちゃんと見ててあげてね」

「うん」

「いつまでも泣いてたら、励ましてあげてね」

「うん」

「……ごめんね」

最後に真美はそう呟いた。僕は何も言えずに、ただ真美の細い体を受け止めていた。

やがて、僕から離れると、真美は本当に最後のさよならを言っ、僕たちの前からいなくなった。

「待ってよ！ 真美！」

浩太のかれ果てた声だけが、森の中を虚しく響いていた。

沈みかけた夕日をバックに、二列縦隊に並んだ野球部の部員達がグラウンドの周りを走っていた。オレンジ色に染まったグラウンドの片隅を彼らの影がゆらゆらと縫っていく。

僕は、彼との会話に戻るために、描きかけのスケッチブックから顔を上げた。

「四年ぶりの再会」

彼は、別段感情を込めた風もなく、そう言った。

「そうだね」

僕も彼の真似をして、感情を込めないように努めて、声を出す。だが、それも上手くいかず、僕は肩をすくめて、描きかけのスケッチブックに目を落とした。

「確か」

そう言って、彼は言葉を止めた。おそらく、僕が顔を上げるのを待っているのだろう。彼の言葉にゆっくり顔を上げると、図っていたように彼は続きを口にした。

「四年前にいなくなったお前の幼馴染、だよな」

いなくなった、という言い回しは、彼の気遣いだった。

「幼馴染、じゃないんだけど」

僕はそう言ってから、ふふ、と笑った。

「彼女が死んでからさ」

死んだ、という言葉に、無愛想な彼の顔がピクリと揺れた。多分、気を遣わなくていいよ、とは伝わったと思う。

「初めてなんだ。あの頃の夢を見たの」

「そうか」

彼はそれだけ呟くと、僕の心中を察したように、虚空に目を留めた。これだけ、僕の話を見目に聞いてくれるのは、彼以外には多分いないだろう。

うん、そう。僕はそう呟いてから、スケッチブックを閉じた。ぱたん、という音が、僕と彼以外誰もいない教室内に、妙に大きく響いた。

「よくは知らないけど」

彼は虚空を見つめたままそう声を出すと、ゆっくりと僕に視線をなぞった。黒ぶちの野暮ったい眼鏡には合わない、彼の整った顔立ちには、相変わらず無表情を作っていた。

「そのことに、何か意味があると思うか？」

「どうだろうね」

それが正直な答え。そして、彼の予想していた答えだと思う。

「じゃあ、会ってみたいとは思うか？」

ただの質問も、彼が口にすれば、それは試されているような気がする。彼は、僕なんかよりずっと世の中を知っているし、絶対的な自分の世界を持っている。だから、彼はその容姿端麗さにはそぐわない扱いを周りから受けていた（放課後の教室に、僕と二人つきりであることからそれは明らかだ）。つまり、彼の目から放たれる特別な光線は、特徴であって特性ではない。だからこそ、彼は別に僕を試しているわけでもなかった。

「それは、夢の中じゃなくて、ってこと？」

「ああ」

あくまでも、どこにでもある日常会話でのほんの一節にすぎない。つまりはそういうことだ。

カチカチカチ……。

時計の針は確実に時を刻んで、小刻みな音を奏でていた。

僕は、目を閉じてその音に耳を傾けた。

もし、この時を刻む音をさかのぼることができるなら。

目を開けると、変わらず光線を放っている彼と目が合った。僕は、一度彼から目をそらして、もう一度そこに目をやった。

「一つだけ、どうしても彼女に伝えたいことがあるんだ」

「そうか」

彼は、何も追及せずに、また虚空に目を留めた。彼には、つまり、どういふことをいちいち説明する必要はない。だから、僕は彼にいいづらいことでも何でも話すし、彼も無表情で真面目に、何でも応えてくれる。

遠くもなく、近くもなく。限りなくあいまいなところに目を留める彼の横顔を僕は眺めた。

どうがんばっても、彼の瞳に映るものを見ることは出来そうになかった。



例えば、数年ぶりのことで、確かに顔は知ってるけど、名前がどうしても思い出せない相手に、親しげに声をかけられたときか。もしくは、名前は知ってるけど、数年のときを経て、別人のように変わり果ててしまった相手に、親しげに声をかけられたときか。分かりやすく言い換えるなら、今の状況は、そんな感じに似ていた。「えっと……」

僕はとりあえず、彼に困惑していることが伝わるように、後頭部に手を置いた。

「ごめん」

これも、とりあえずの行為。

「えっと、つまりあの時の会話の続き、ってことだよな」

馬鹿みたいに確認して見せる僕に、彼は「ああ」とだけ言って、ぶいっと顔をそらした。別に気を悪くしたわけじゃない。彼にとつては、それは僕への最低限の気遣いでもあり、礼儀のようなものだった。

「ちよつと、気になってな」

彼は無表情のまま、そう声を出した。

そう。つまり、ただ単にそれだけのことなのだ。つい一時間ほど前に交わした会話が脳みその端つこのところに引つ付いて離れない。そのままでは気持ち悪いから、彼は帰りの道中、肩を並べて歩く僕にそれを吐き出した。

ただ、彼の場合「そうそう、お前がさっき教室で言ってたことだけだよ」「という前ふりを活用できずに、」どうしても伝えたいことがあるって言ったよな」となっただけの話だ。

ただ、僕が戸惑ってしまうのは相手が彼だからこそだ。もし隣にいるのがものすごく頭のいい、人語を理解するサルでもこんなに驚きはしなかったと思う。彼が、一度終わった会話を掘り返してなお、

気になっていたというのは、それぐらいありそうもないことなのだ。  
「気になるって言うのは、つまり」

僕が声を出すと、彼は目だけを僕に向けた。

「彼女に伝えたいことが、なんなのかってこと？」

「そうじゃない」

だろうね、とはもちろん口には出さない。そんな私的なことを詮索してくるほど、彼は無粋でもないし、知りたがりでもないことを僕は知っていた。

「伝えたいことがあるってことは、そうなってほしいということだ」

「うん。まあ、そうなるね」

「だが、お前はそうはならないと思ってる」

「うん」

「それが気になる」

申し訳ないと思う。それでも僕は後頭部に手を置いた。

「言いたいことがよく分からないんだけど」

「お前が、そうならないと思ってることが、引かかる」

うん。つまり？

「つまり、そうならないと決め付けるのはおかしいということだ」  
彼は僕の顔から、もっとも僕の知りたがっている答えを読み取って、それに答えてくれたみたいだった。ただ、理解すること、納得することは別次元のことだ。少なくとも、彼の放った言葉は、僕を混乱させるには十分な威力を持っていた。

しばらく、僕は足を動かすことも忘れて、彼の顔を凝視した。

「大丈夫か？」

心配する、という意味を彼は知っているとと思う。ただ、彼の場合は、その意味が声にも表情にも出てこないだけだ。つまり、今の彼は相変わらずの彼のままであり、今彼の口から出た言葉も、冗談や、からかい、というたぐいのものではない、ということだった。

「ごめん」

二度目の謝罪に、彼はうんざりしたように肩を軽く持ち上げた。

おそらく、彼の世界から見た僕は相当ずれているのだろう。

「こんな言葉を聞いたことはないか？」

仕方ないから、分かりやすく説明してやるよ。というところだろうか。

彼はもったいぶったように、一度僕から目をそらした。その間に「馬鹿馬鹿しい」と口に出してその場を後にすることもできたけど、僕はその場から動かなかった。どう間違っただとしても、彼が馬鹿馬鹿しいことを口に出すとは思えなかった。

彼は虚空に向けた目を僕に戻して、僕がそこに留まったままであることを確認した。それから、小さくうなずいて見せて、彼は言った。

「人が空想できる全ての出来事は起こりうる現実だ」

「つまり？」

「つまり、お前がそうしたいと思っているなら、それは起こりうる現実だということだ」

「なるほど……」

やっぱり、理解はできても納得はできそうになかった。でも、彼は僕に納得させるためにこうして一度終わった会話を掘り返した上に、惜しげもなく自分の世界の一部をさらけ出してくれているのだ。このまま、納得したふりをしてしまふのは、あまりにも彼に対して失礼だろう。

「言ってることは分かるけど」

それは癖というわけじゃない。ただ、そうすることが一番相手に自分の心理状況を判りやすく伝えることができるだろう。と思うので、僕は後頭部に再び手を当てた。

「それは、ありえないことだと思う」

「どうしてだ？」

どうしてだ？僕は自分に問いかけた。

「そうだな。少なくともこの四年の間にそういうことはなかったからね」

それらしいと思い当たることも。そう付け足して、僕は続けた。

「だから、ただあの頃の夢を見たっただけで、そんな都合のいいことが現実にかかることはありえないと思う」

確かに。彼はそう呟いた。

「お前の言っていることは、道理にかなってる」

「うん」

「ただ、それがすべてなわけじゃない」

確かにそのとおりだと思う。世界は、僕の知らないことで満ち溢れているし、それがあべき姿なのだ。でも、そのすべてなわけじゃないものを僕は知らないし、体験したこともない。彼の言っていることは、確かに存在している、別世界のことだ。

「でも、そのすべてじゃない一部を、僕は今まで知らないで生きてきた」

「すべてじゃない一部、じゃない」

彼は珍しく、僕の発言を否定した。

「この世界には、道理には決して収まりきらないものが多く存在してる」

そして。彼はそう呟いて、天を仰いだ。

「俺たちは、すべてじゃない一部の中で生きてるんだよ」

\*\*\*

彼と顔を合わせる事になったのは、多分、初めからそうなることになっていたからなのだろう。毎年一年ごとに行われるクラス替えが、成績やら、普段の素行やら、その他さまざまなサンプルを元に、厳正な審査を得て出来上がっていくように、生徒一人一人の名前の書かれた紙を一つの箱に閉じ込めて、そこから適当に担当の教師が一人一人を割り振っていたとしても、それは変わらない。僕たちは、気の遠くなるような、天文学的確率の難関を知らず知らずのうちに突破して、必然的にそこに割り振られてもいたし、単にたまたまそこに割り振られてもいた。

すべてのことには、偶然も備わっているし、必然も備わっている。ただ、そのどちらか一つが単独で物事に働きかけることはない。僕たちは、偶然と必然の狭間で揺れ動き、結局は、そのどちらにも引き寄せられて生きているんだ。

お前たちはもう三年生だ。毎日のように聞かされる言葉は、変わることもなく教室に響いていることだろう。

「もう二年生とは違うんだ」と当たり前のことからはじまり、五分もすれば、「もう受験まで時間はないんだ」に発展し、十分も経てば息を切らして、そこに戦争を持ち込んでくる。

それが、進学校の三年生を担当する教師としての義務だとしても、

やっぱり僕には、朝の貴重な十分間をそんなつまらないことでつぶす気にはなれなかった。少なくとも、息を切らしながら、秀原のだみ声を聞くために教室に駆け込むよりは、ふかふかの布団の上で、ちよつとだけ長く夢の中にとどまっているほうが、ずっといい。どう頭をひねってみたって、僕には夢の中のほうが魅力的に映る。

だからといって、秀原を否定しているわけじゃない。その半分以上皮膚に侵食されたおでこも、ドラえもんの出来損ないのような体型も、すべては自分のことを省みずに、二十年以上も生徒たちに変わらぬ情熱で接してきた何よりの証なのだろうから。

その勲章を武器に秀原は生徒たちに正論を投げつける。そして、僕以外のみんなはそれを、そつなく器用に受け取って、本人に気づかれないようにそつと捨てている。投げつける、受け取る、捨てる。

やっぱり、僕には朝の十分で秀原の講義を買う気にはなれなかった。かといって、十日もそれが続けば、いい加減目をつぶっているわけにはいかないらしい。

「森本、それと加藤。お前たちはちよつと残れ」

秀原のその言葉で、ようやく一日の授業から開放された生徒たちのざわめきは、ぴたりと止んだ。いつもなら、くだらなく教室に残って話し込む数人の生徒は、教台の前で仏頂面をして立っている秀原と指名された僕たちを交互に見てから、そそくさと立ち去り、教科書を開いてそこに目を落としていた数人の生徒は、はいはい、勝手にしてくださいよ、という具合に、無言で帰り支度を整えると、すたすたと教室から出て行った。

やがて、教室に僕たちだけが取り残されると、秀原は仏頂面を維持しながら、声を出した。

「どうして残されたのかは、分かるな」

僕たちの返事を待たずに、秀原は続けた。

「ただの遅刻でも、内申書には大きく響くんだ。お前たちは、まだこれ以上自分の首を自分で絞めるつもりか？」

初めは僕をにらんでいた秀原の視線が、斜め後ろへと注がれる。その時点で、ようやく僕はこの忠告が僕だけになされているものではないことに気づいた。

自分の首を自分で絞める変わり者は、どうやら僕だけじゃなかったらしい。

秀原は一通り説教を済ますと、捨て台詞に「もしこれ以上こんなことが続くようなら、こちらにも考えがあるからな」とはき捨てて、教室を出て行った。

僕は秀原の吐き捨てた、考えというものを少しの間、頭の中で思い浮かべた。それが、毎朝家まで押しかけてくるというものにせよ、そうじゃないにせよ、これ以上このままを続けていると面倒くさいことになりそうだった。

とりあえず、やることはなくなった。秀原の説教も終わったし、その後物思いにふけるにしても、これ以上ここに残る必要はなかった。それでも、僕が席を立たなかったのは、斜め後ろにいる彼が気になったからだ。

秀原が出て行ってから、十分弱。これ以上席を動かずに、何の行動も起こさないのはさすがに不自然だった。

「はあ……」

わざとらしくため息をついて、僕はチラッと彼の様子をうかがった。何の反応も返ってこなかったので、今度は体ごと彼のほうを向いてみせる。

「はあ……」

二度目のため息。それも彼の耳には届かなかった。彼の目には僕の姿が全く映ってはいないのかもしれない。人間の目の構造を考えれば、おそらく彼の視界の端っこぐらいには僕は映っているはずだけど、彼は見事な演技でそれをなかったことにしようとしていた。

早く帰れよ。そう言われているのはもちろん分かっている。でも、それをここでしてしまうのは、あまりにも不自然なような気がしたし、ため息でつないで無理やり自分の存在をアピールするのも間拔

けな気がした。

「おい、用がないならさっさと帰れよ」

彼にそう言われてから席を立つのが、一番自然な形だろう。

「どうした？」

いつの間にか、彼の視線が僕に向いていた。いつの間に、こうなつたのだろうか？

「どうした？」

僕は彼とまったく同じ台詞を吐いて、彼に目を向けた。今の状況が上手く把握できなかった。

つまり、用がないならさっさと帰れよ、ということだろうか。一番自然な形で僕をここから追い出してくれる、これは彼の無愛想な好意。そう受け取ればいいのか？

「どうした？」

彼は少し待つてから、もう一度同じ質問をしてくれた。

どうした？ 用がないならさっさと帰れよ。には聞こえなかった。つまり、彼の目には本当に僕が映っていなかっただけのことなのかもしれない。もし、視界の端に留まっていたとしても、ただ単に気づかなかっただけ。そして、ため息も耳に入らなかった。それなら、彼の疑問符の浮かんだどうした？ も納得できる。

自分のほうに体を向けて、変にうつむいてる奴がいる。なんだろう？ 用でもあるのだろうか？

どうした？

うん。無理がない。

「……」

納得した時には、すでに彼の質問に対する回答権はなくなっていた。質問の答えを考えるにしろ、一分は長すぎるだろう。彼はすでに僕から顔をそらして、窓の外を相変わらず背筋をぴんと伸ばしたまま、眺めていた。

「あつと……、君も？」

彼はこちらに顔を向けてくれた。どうやら、気長に待っていて



いたみたいだ。

「なにがだ？」

「君も、秀原の講義をサボってたの？」

彼は僕の目を確かめるように見た後に、ゆっくり目をそらして、「ああ」と呟いた。

「でも、僕が教室に入ったときには、君は席についてるよね」

「ああ」

「僕よりも少しだけ早く来てたってことかな」

「ああ」

「残念だな」

彼は、なに？ とは声に出さず僕に顔を向けた。変わりに僕は、だつて、と声を出した。

「もし君がもう少し遅くて、僕がもう少し早ければ、僕たちは今頃、秀原の欠点を十個ぐらい挙げて、笑い合ってたかもしれない」

彼は少し考えるように僕から目をそらしてから、再び僕に視線を戻した。

「確かに、そうなっていたかもしれないな」

「うん」

それも悪くない。だろうか？

「それで、君はどうするの？」

「なにがだ？」

それはつまり、お前は どうするんだ、ということだろう。

「とりあえず、僕は明日から10分早起きすることになるけど」

君は？

「そうだな」

彼は小さく唇をゆがませて、「とりあえず、このまま様子を見てみる」と言った。

「本気？」

「気になるだろ。あいつの言ってた考えってやつが」

僕は少し考えるふりをして、視線を上に向けた。

「確かに」

それが、毎朝家に押しかけてくるものなのか、それとも、それ以外のものなのか。

「気になるね」

視線を彼に向けると、彼は小さくうなずいて、言った。

「あいつなら、やりかねない」

「確かにそうだし、できれば確かめてもみたいけど、それは止めたほうがいいと思うよ」

「どうしてだ？」

「そうすると、君が主犯格ってことになる」

彼が目を細めるのを見て、僕は言った。

「気づかなかった？　僕たちは今、共謀してストライキを起こしてるんだ。我々に穏やかな朝の10分を！　ってね」

「ああ」

彼は煩わしそうに頭を一度かいた。

「そういえばそうだったな」

「こればかりはどうしようもないね」

「そうだな」

「考え直す気になった？」

「考えとくよ」

ああ、そう。

とりあえず、これ以上会話を引き伸ばすのは不可能に思えた。もう彼から僕に声をかけてくることはないだろうし、僕からも、彼にかける言葉は一つしかない。

「そろそろ、帰る？」

僕は言った。

「そうだな」

彼はうなずいて立ち上がった。

「一つ、聞いてもいいか？」

教室を出ようとドアをくぐろうとしたところで、彼の声は響いた。

振り返ると、自分の席の前から彼は一步も動いていなかった。

「俺は、お前と一緒に帰るのか？」

決して、それが嫌だといってるわけじゃない。遠まわしに勘弁してくれ、といってるわけでもない。だからこそ彼の周りには人が集まらないのだろう。

僕は考えるふりをしてから、視線を上に向けた。彼に目を戻すと、彼は真剣な目で答えを待っていた。

「まあ、そうなるだろうね」

彼の第一印象は、品がよくて育ちのいいお坊っちゃん、だった。多分、誰が彼と顔を合わせても初めはそういう印象を抱くだろう。そして、彼と三十分同じ時間を過ごせば品がよくて育ちのいい無口なお坊っちゃん、となり、もうさらに三十分過ごせば品がいいわけじゃない育ちのいいわけじゃないお坊っちゃんでもない、無口な人間、になる。でも、あくまでそれは中間距離から観察した場合の彼の人物像でしかない。遠距離から見た彼が品がよくて育ちのいいお坊っちゃんであり、中間距離から見た彼が無口な人間であるなら、当然、近距離から見た場合も彼の人物像は変わってくるだろう。

初めて顔を合わせてから、半年。ようやく彼は僕にその姿をチラッとだけ見せてくれた、ということになるのだろうか。

「俺たちは全てじゃない一部の中で生きてるんだよ」

彼のその言葉を聞いたとき、僕はなるほど、と思った。

半年間、いくら目を凝らしてみても見えないはずだ。彼の見える世界は、僕が十年前に置き忘れてきた世界と同じだったのだ。

そこでは誰でもスーパーマンになれるし、仮面ライダーにだってなれる。現に僕は小学校二年生の時の夢はウルトラマンになることだったし、それが叶うものだと本気で信じていた。

ウルトラマンになれる。

もちろん、彼は実際にその確率が人類の歴史をぐるっと一回りしても叶いそうもないほど、途方もなく低いものである、と理解はしているだろう。この世界で生きて、僕と同じ高校に通っているのがその証拠だ。でも、彼は全てじゃない一部、の外に目を向けることができる。だから、それがあり得ないことだとは考えない。

「そうならないと決めつけるのはおかしい」

ふむ。

「お前がそうしたいとおもってるなら、それは起こりうる現実だ」

ふむ……。

忘れていた。というより、思い出す機会がなかっただけのことだった。そういえば。ふと、そう思うと、それは自然に僕の頭の中に浮かんでいた。

そういえば、真美も全てじゃない一部、の世界に目をむけていたのかもしれない。

\*\*\*

\*\*\*

「もし、よ？」

「なに？」

「もし、私が死んでここからいなくなったら、公平はどうする？」

もし、だけのまえふりの後、真美はぶしつけにそんなことを言った。

「もし？」

確認してみせると、真美は肯いた。

そう。もし。そう言って。

「とりあえず、三日間はぼうつとしてるかな」

「ぼうつと？」

「うん」

「じゃあ、三日経ったら？」

「一週間泣きはらして、すっぱり忘れる」

むっと眉を寄せて、真美は僕をにらんだ。僕は苦笑して

「もし、だろ？」

と言った。

「じゃあ、もしそうになったら」

「もし？」

僕の声には目もくれず真美は言った。

「私に会いたい？」

そして、確かめるように僕を見つめた。

彼と別れてから僕はまっすぐ家に帰った。

駅から徒歩三十分。

しやれた店が窮屈そうにひしめき合った通りを抜け、派手な看板をいくつも掲げたみすばらしい商店街を抜け、我が物顔で立ち並ぶ住宅地の端っここから少し先に、そのマンションは建てられていた。狭い土地に無理矢理押し込めるように建てられたマンションだった。目の前には駐車場の代わりに小さな公園があり子供たちが無邪気に遊んでいる。僕は全体をモスグリーンに染められた、五階建てのマンションの入り口の前で足を止めた。チラッとだけ子供たちの悲鳴にも似た叫び声に目を向けてから、やることもなく部屋に向かう。2DKのその部屋は父親と二人で住むには十分な広さだった。僕は自分の部屋に戻ると部屋着に着替えてから、パイプベッドの枕元に無造作に置かれた目覚まし時計に目を向けた。目覚まし時計は僕と目が合うと口をへの字に曲げて

「五時四十分だよ。見りゃ分かるだろ」

と不機嫌に時間を教えてくれた。

「もうすぐ六時か……」

そう呟いて目覚ましに目を留める。すると、目覚ましは、背中から甲高い音を鳴らした。

「んだよ、文句あんのかコラ！」

「そんなことないけど」

僕はそう呟いて頭をぽんと押した。すると、目覚ましはぴたりと怒鳴るのをやめた。

「それならいいんだよ。ほら、さっさと行つてきな」

確かにそんな声が聞こえた。僕は苦笑してから

「ああ」

と返事をした。

さて。

これからやることは決まっている。テレビをつけてキッチンの冷蔵庫からお茶を出して一口だけ飲む。飲んだらそれをしまつて、五分間テレビを眺めてから結局はテレビを消して外に出る。

いつものことだ。そう、ただの習慣であり、意味のないこと。

僕は小さく息を吐くと、部屋のテレビをつけた。キッチンに入り冷蔵庫からお茶を取り出してそれを飲むと、部屋に戻ってパイプベッドに座つてテレビを五分間眺めてからため息をついた。ちらつと目覚ましに目を向ける。

「ほれ、行くんだろ」

そう言っているような気がしたけど、それは違つたかもしれない。目覚ましの口はすでにあり得ない方向を向いていた。

僕はテレビを消すと、玄関に向かった。

いつものことだ。そう、ただの習慣であり、意味のないこと。



く7く

「あら」

「あ」

外に出ると、ちょうどマンションに入ろうとしていた美咲さん  
とぼったり顔を合わせた。僕たちは同時にお互いの顔を確認してか  
ら、同時に声を出して、同時に笑いかけた。

「出かけるの？」

「ええ、その本屋まで」

「参考書？」

「漫画です」

美咲さんは上手に眉をつり上げて

「コラ」

と僕の頭を小突いた。

「受験生がなに言ってるの」

「戦士にも休息は必要ですから」

「この時期に休息をとる戦士がいるかしら？」

僕は少し考える振りをしてから言った。

「ここに」

美咲さんの手をひょいとかわしてから、僕は美咲さんの左手に  
目をやった。僕の視線に気付いた美咲さんは、買い物袋を提げた左  
手を軽く持ち上げて言った。

「カレーよ」

「またですか？」

少しだけ殺気のコもった攻撃。それが空をきると美咲さんは、  
もう、と悔しそくに声を出した。

「またですか？ やったあつて言おうとしたんですよ」

「よく言うわよ」

「ほんとですよ。美咲さんのカレーなら毎日だって食べられます」

「なるほどね」

「なんです？」

「今までそうやって女の子を口説いてきたわけね？」

「よしてくださいよ」

そう言って僕は買い物袋に手を伸ばした。

「重いでしょう。持ちますよ」

「なるほど」

「怒りますよ」

まあ怖い。美咲さんはそう言っていると胸に手を置いて、目をパチパチさせた。まるで下手な役者見習いがやるような演技も、美咲さんがやると高度な演技に見えてしまう。

「大丈夫よ」

ふふ、と笑って美咲さんは言った。

「残念ながらカレーの材料しか入っておりません」

「それは残念ですね」

「あら、私のカレーなら毎日でも食べられるんですよ？」

「いえ、僕が言ってるのは美咲さんの部屋に上がり込む口実がなくなっただけですよ」

四度目の攻撃はうまくかわせなかった。美咲さんは僕の頭をとらえると、うれしそうにガッツポーズをとった。

僕は苦笑して

「じゃあ、僕はそろそろ」

と言った。

「あ、うん。ごめんね、引き留めちゃって」

「じゃあ、行ってきます」

そう言って背を向けた僕に美咲さんは、あ、と言って声をかけた。

「なんですか？」

顔だけを後ろに向けた僕に、美咲さんは言った。

「うん。その……雨、降りそうだったから」

僕は顔を上げた。確かに、いつの間にかできあがったのか、そこにはどす黒い雲が見渡す限りを我が物顔でのさばっていた。

僕は美咲さんに目を戻して言った。

「大丈夫です。本屋すぐそこだから」

美咲さんは何かを言いかけようとして止めた。それを悟られまいと動かしかけた唇を無理に持ち上げたせいで、美咲さんの笑顔は微妙に形を失っていた。

僕はその笑顔に笑みを返して言った。

「じゃあ」

「うん」

子供達の悲鳴は絶えることなく響いていた。

美咲さんは僕たちとほぼ同時期にあのマンションに越してきたらしい。ということは、僕たちはもうかれこれ五年のつきあいということになる。

基本的に僕も父さんもあまり人付き合いは上手じゃない。いや、上手とか上手じゃない以前の問題で、僕たちは親子そろってそういうことには無頓着なだけだった。でもまあ、お隣の人に挨拶をする程度の常識は持ち合わせていた僕たちは、引越してきたその日に、その町のデパートへ足を運んだ。

高級すぎず、それでいて安すぎず。日に一度ぐらい顔を合わせるときは愛想笑いをして、挨拶をかわす程度のお隣さんに贈る愛想だけの贈り物。僕たちは、一通りデパートの中を回ってさんざん頭を悩ませた挙げ句、二千円の何かよく分からない詰め合わせを買った。

もし、隣に住んでいるのが一人暮らしの若い女の人だと分かっていたら、それは、複雑な種類の中から適当に選んだ防犯グッズになっていたかもしれないし、痴漢撃退用の一度目に受ければ地獄を

見る特殊なスプレーの詰め合わせになっていたかもしれない。結局僕たちは何かよく分からないものか、気の利いているようで実はそうじゃないものを贈る羽目になっていたのだ。

きれいな人だな。それが愛想笑いをして、父さんから包みを受け取る美咲さんを見て一番に感じたことだった。飛び抜けて美人というわけじゃないし、身につけているものも少し控えめで周りに見せるためのようなものじゃなかった。多分、美咲さんと町ですれ違ったとしても僕は振り返って見るようなことはしないだろう。

笑った時にできる小さなえくぼとか、控えめな態度で笑顔を振りまいて父さんと話すところとか、多分、そういうところに僕が目は向いていたんだと思う。

それから僕たちは日に一度ぐらい顔を合わせたときは愛想笑いをして挨拶をかわす程度のお隣さんから、日に何度か顔を合わせるのと立ち止まって少し会話を交わすお隣さんになり、冗談を言い合うお隣さんになり、放っておくとコンビニ弁当だけで済ますお隣さんの為に、栄養配分を考えた夕飯のおかずを毎日届けてくれるお隣さん、へと変わっていった。

もし僕たちが美咲さんの隣に越してこなければ、僕たちは顔を合わせても愛想笑いを浮かべた挨拶だけで通り過ぎることになっていただろうし、今頃は栄養失調になってもいただろう。

一歩間違っていたら僕も父さんも、今頃は生きてはいなかった。つまりはそういうことだ。

十分も経たないうちに、空からのうめき声は雨に変わっていた。僕は、近所の中学校の裏を通り、獣道をさらに奥に進んだ。

通称、迷いの森。初めてここに僕を連れてきたとき、浩太は僕にそう教えてくれた。

「うん、迷いの森。僕が生まれる前からあって、ずっとそう呼ばれてるらしいよ」

ざざざざざ……。

森の鳴き声と雨が木々を叩く音が、まるで呼吸をしているみたいに、どこからともなく響いていた。

この森全体が一つの生き物であり、僕はそのおなかの上に立っている。そんな感覚を覚えるのは、あの頃も今も変わらなかった。

僕は落ち葉や枯れ枝を踏み分けながら、狭い一本道を歩いた。

「ふふ、誰も知らないんだよ。知ってるのは僕と真美だけさ」

そう言っ、浩太は僕をそこへ案内してくれた。

「ここだよ。これをどけるとね」

等間隔に背の伸びた木。その間に生えた名前の分からない植物は、体のいたるところから触手を伸ばして胞子を飛ばしていた。その植物をかき分けて僕は奥へと進んだ。雨のせいで視界はほとんど遮られていた。見えないところから冷たいものが僕の首の後ろや、腕や足をつついては、クスクスと笑っていた。

「もう少しだよ。この先にあるんだ。そしてね」

雨はさっきよりも勢いを増していた。

「そこにね、真美がいるから」

あるとき、僕はなんて答えたろう？

あるとき、僕は？

「会いたくない」

僕は言っ、

「どうして？」

「ちゃんと成仏して欲しいから」

「真面目に答えて」

「真面目につて……」

「いいから、真面目に答えて」

真美はそう言つて僕をじつと見つめた。五秒間、真美に付き合うかどうか僕は考えた。そして、ため息をついた。

「じゃあ、こうしよう。真美が死んでここからいなくなった。僕は三日間ぼうつとして、一週間泣きはらして真美のことをすっぱり忘れた」

真美は黙つて僕の顔を見つめていた。

「その後、僕はここで真美とした会話を思い出す。真美には忘れるなんて言つたけど、そんな簡単に忘れることなんてできなかった」

分かるだろ？

「ここで会いたくないって答えないと、僕は妄想の中で生きて行かないやいけないんだ」

「それはつまり、会いたいつてこと？」

「さあ。ただ、幽霊の真美と会いたいとは思わないだろうね」

「つまり、会いたくない」

「そうなるかな」

そこは、三百六十度を森に囲まれた広場だった。ずっと昔に作られたらしいくたびれた不細工なベンチが一つだけ真ん中に置かれている。それがいにはなにもない、僕と浩太と真美しか知らない場所。

雨のせいで目の前はほとんど見えなかった。僕は額の上に手を置いて、目を細めた。ずっと向こうに置いてあるベンチの輪郭だけがかろうじてもやのむこうがわから透けていた。

「じゃあ、こうしない？」

「なに？」

「会いたくないって言つたくせに、公平がどうしても私に会いたく

てたまらなくなつたとき。そのときは、私から会いに行くわ」

「構わないけど、そのときは多分逃げ出すと思うよ」

「いいわよ。どこまでも追いかけてやるから」

分からなかった。いや、分かつてる。理解はしてる。ただ、納得ができないだけだ。

もやの奥に見える輪郭。そこに座っている誰か。

すべてのことには偶然も備わっているし、必然も備わっている。それを説明しろと言われたところで、そんなことは不可能だ。できることと言えば、物事の終わりに答えをつけることだけ。どうして？　と言われれば、さあ、と答えるしかない。雨は何かに吸い込まれるように弱まっていった。僕は額の上に手を置いたまま、ベンチから中途半端な距離を置いて立ち止まった。

ベンチに座っている誰かは、少し前かがみになって、両手で頭を抱えていた。

顔は見えない。でも、今この状況でそこにいるのが真美以外の誰かである可能性を考えるのは僕には無理なことだった。

「真美？」

僕の声はわずかな雨音にかき消された。

僕の声が届いたとは思えない。それでも誰かは何かに応じたように、ゆっくり顔を上げた。

真美だ。

真美だった。僕の記憶の中にかろうじて残る真美。そこに足りないものをすべて付け足した真美が、僕と同じ場所に存在していた。僕は訳が分からずベンチの前に歩み寄った。真美は、なにも言わず少しうつろな表情で僕を見上げた。

「俺たちは、すべてじゃない一部の中で生きてるんだよ」

やがて、真美はうつろな表情のまま僕を見つめると、少し首を傾げて眠そうな声を出した。

「……公平？」

それはまるで、つまらないシューティングゲームだった。

後から後からの向かって出てくる標的を、ただ打ち落とすだけのゲーム。標的から勝手に的に向かってくるのだからこっちは、タイミングを計ってボタンを押すだけでいい。それだけで、標的は派手な音を立てて粉々に砕け散っていく。掘り返していけば可能性

はいくらでもあった。実は死んだ真美は同姓同名のそっくりさんで、本人ではなかったとか。真美が死んだという旨のあの手紙は、真美の手の込んだいたずらだったとか。後から後からそれらの標的は的に向かって飛んでいき、僕はそのたびに射撃のボタンを押していた。そんなわけない。全ての可能性はその一言で片が付いた。それでも、僕は真美が僕と同じ場所に存在している理由を探した。真美が僕と同じ場所に存在する以上、その理由は必ずどこかに隠れているはずなのだ。

僕はマグカップを二つ食器棚から取り出した。ゆっくり一つ一つの動作を確認しながら、五分をかけてココアを作る。

大丈夫。僕は冷静だ。そう自分に言い聞かせて、テーブルにココアを入れたマグカップを二つ置いた。それから少しして、ガラガラ、とバスルームから音が響いた。

「大丈夫。僕は冷静だ」

声に出して確認してみせる。

うん。僕は冷静だ。

ほとんど音を立てずに真美はキッチンに入ってきた。何の柄も入っていない赤色のTシャツに、Gパン。僕の用意した着替えを真美はそのまま着込んでいた。

「私には大きすぎるみたい」

そう言つて、真美は腰までずれ落ちたGパンをさらにずれ落ちないように手で押さえた。



「あ、うん。そうだね」

大丈夫。僕は冷静だ。

「とりあえず、座れば。ココア入れたから」

「うん。ありがとう」

真美はそう言つて、僕から離れた方の椅子に腰を下ろした。僕は流しの前に立ったまま、本人に気づかれないように真美を眺めた。

真美はマグカップを両手で包み込んで、ゆっくり口に運んだ。そして、一口だけ飲むとマグカップをテーブルに置いて、困ったような顔を僕に向けた。

「どうかした？」

一応聞いて見る。すると、真美は小さく笑つて

「味見した？」

と声を出した。

「いや、してないけど」

「じゃあ、してみて」

真美の言いたいことがよく分からず、僕はマグカップを手にとつて口に運んだ。僕ののどを静かに暖かい液体が通過した。そして、僕は顔をしかめた。ダイレクトに真美の言いたいことが伝わってきた。

「いれ直すよ」

「いいよ」

「でも」

「いいから、シャワー浴びてきて。そのままじゃ風邪引いちゃう」

真美は立ち上がると僕の手からマグカップを奪った。僕は流しに向かう真美の背中を見ながら、自分がそっぴいば濡れたままだったことを思い出した。

「うん」

僕は言つた。

大丈夫。僕は冷静だ。 二十分。熱湯を浴びながら僕はひたすら自分に言い聞かせた。大丈夫、僕は冷静だ。毎日ココアを飲ん

でるからって、時にはうまくいられないこともある。ちょっとした手違いでほとんど味がしないものができあがっただけのことだ。

大丈夫。うん。大丈夫。

キッチンのをぞくと、椅子に座って真美がマグカップを口に運んでいた。しばらく、顔だけを出してその様子を眺めていると、不意に真美は

「座ったら？」

と言葉を発した。視線は僕をとらえてはいなかった。でも、独り言には聞こえない。

「ふう、気持ちよかった」

タオルの上から頭をかきながらキッチンに入る。これだけとばけた演技を素知らぬ顔で実行できる人間がこの世界に何人いるだろう？

「とりあえず座れば。ココアいれたから」

真美はそう言って僕を見上げた。

「ああ、うん。ありがとう」

真美と向かい合って椅子に座る。マグカップを口に運ぶと、少し薄めの甘味が口の中に広がった。

「二十分」

「え？」

僕は顔を上げた。真美はマグカップを両手の中にいれたまま

「少しは落ち着いた？」

と言った。

「僕は冷静だよ。」

「分かってる。ただ、落ち着かないだけだね」

落ち着かない。僕は真美の瞳から逃れると、乱暴にタオルで頭をかいた。

「うん。そうだよ。どうやらそうみたいだ」

「無理しなくていいよ。落ち着かないなら、冷静になる必要もないと思う」

「じゃあ、どうしろって言うの。手放しに再会を喜べって？」

そんなの無理だよ。僕は呟いた。

「なんなんだよ、一体」

わけの分からない感情が急に僕の中で膨らんでいた。僕は椅子から立ち上がって、真美に背を向けた。

「四年前、真美は僕と浩太の前から勝手にいなくなった。勝手にいなくなって僕たちの知らないところで勝手に死んだ。僕たちは真美の勝手に振り回されて、突然二度と会えなくなったんだ」

そんなことが言いたいわけじゃない。それでも、一度出た言葉は止めようもなく出口をさまよっていた。

「真美は四年前に死んだんだ」

僕は自分に言い聞かせるように言って、真美と向かい合った。

「中学二年生の夏。真美は僕と浩太の前からいなくなって、それからも二度と会えなくなった」

それでも、真美は僕の目の前にいる。

「教えてよ」

これは夢なのか？ 「どうして真美がここにいるんだ」

それとも現実？

「ごめんね」

真美の小さな声が僕の耳に響いた。

「え……」

「公平のこと、混乱させるつもりはなかったの」

「……」

「私にもね、分からないの」

「分から、ない？」

僕と目が合うと真美はうん、と呟いて目をそらした。「なにも分からないの。どうしてあそこにいたのか、どうやってあそこにいったのかも。気がついたら私はあそこにいて、独りぼちであそこに座ってた」

真美はマグカップを手の中で弄びながら、テーブルの端っこを

見つめていた。僕は真美の手の中で不器用に踊るマグカップに目を落とした。

「なにも分からないの。冷たくて、不安で、なにも分からなかった」  
マグカップは真美の手の中で踊るのを止めた。顔を上げると、真美は僕を見ていた。

「でも、誰かが私を呼んだ。そして、公平が私の前にいた」

「真美」

「まるで、お化けでも見てるような顔してね」

「……」

あのとき、僕の声が真美に届いたとは思えない。それでも、真美が誰かに呼ばれたというのなら、それは予感のような限りなく不確かなものを感じたからなのかもしれない。そして、僕もその予感のようなものに引き寄せられてあそこに立っていた。

「ごめん」

僕はそう呟いて椅子に座った。

「あんなこと言うつもりはなかったんだ」

「謝るのは私の方だよ」

「え？」

「だって、言うつもりはなくてもあれは公平の本心でしょ？」

別に見透かしてるわけじゃないと思う。真美は僕の言葉を聞いて感じたことをそのまま口に出しているだけだ。真美は無理に唇をゆがめて笑みを作っていた。多分、僕も同じような顔を真美に向けていると思う。

「うん」

僕は肯いて言った。

「でも、言うつもりはなかった。そんなこと言っても、もう時間は戻しよいいがない。それに、そのおかげで僕と浩太の負った傷は最小限で済んだ」

「でも、私のせいで傷つけたわ」

真美はそう言っただけ唇をかんだ。

沈黙の中で僕はかけるべき言葉を探した。真美がそのことで責任を感じるなんて、そんなの間違ってる。でも、僕にそれを言葉に代えることはできなかった。

「違う」

真美は泣きそうな顔で僕を見つめた。

「そうじゃない」

「そうでしょ？」

「真美のせいじゃない」

「ずっと謝りたかった」

「いいよ」

「ごめんね」

ずっと謝りたかった。それは僕の台詞なのに。

「謝るなよ。誰かが謝るようなことじゃないだろ」

「そうだね……」

分かってる。真美はそう呟いて立ち上がると僕に背を向けた。その後に、頬を二度拭ったことには気づかない振りをして、僕は言った。

「とりあえず、今の僕は落ち着いてるし冷静だよ」

もう一度頬を拭って鼻をすすってから、真美は僕に顔を向けた。

「だから、一番初めに言い忘れたことを今言っとくよ」

「言い忘れたこと？」

「久しぶりだね、真美」

久しぶりだね。真美はうつむいて、確かめるように呟いてから顔を上げた。

「なんか今、すごく懐かしいって気がした」

「だろうね」

なんせ、僕たちは四年も顔を合わせていなかったのだ。僕たちの再会にちょっとした手違いと間違いがあったにしても、懐かしむことには何の問題もない。

「僕もそうだよ」

そう言つて僕は真美から目をそらした。  
時計の針はだるそうに規則正しい音を奏でていた。

少ししてから、美咲さんがカレーをタッパーに入れて届けにきてくれた。なるべくいつもどおりに振舞う努力はしたつもりだったけど、それが上手くいった自信はなかった。

「あれ？」

そう言つて、美咲さんが真美の靴に気づいたときには、僕の心臓は口から飛び出しそうになっていたし「もしかしてお邪魔だった？」と耳打ちされたときには、危うく、ひっくり返りそうにもなっていた。

「どうしたの？」

もし美咲さんにそう聞かれていたら、僕は本当のことを話し出していたかもしれない。でも、美咲さんは不思議そうな顔で「大丈夫？」と声をかけて、僕が首を縦に二回振るのを確認すると、何も追求せずに自分の部屋に帰ってくれた。

「別に、指名手配中の凶悪な殺人犯をかくまってるわけじゃないでしょ？」

キッチンの影から僕と美咲さんのやり取りを見ていたらしい。僕がキッチンに入ってくるなり、真美はそう言った。

「だからだよ」

僕は不機嫌に声を出して、椅子に座った。

「どういう意味？」

「ここに座ってる未確認生物と顔を合わせれば、指名手配中の凶悪な殺人犯も裸足で逃げ出す。ってことじゃない？」

「こんなかわいい女の子なのに？」

「こんなかわいい女の子なのに」

同じ口調で言つてやると、真美は不満そうに頬を膨らませてから、

ぺろつと舌を出した。

「失礼しちゃうわ」

僕はため息をついた。

確かに、父さんは真美のことが好きだったし、真美も父さんのことが好きだった。別に、それはそれでいいと思うし、文句を言うつもりはない。

でも、さすがにそれはないと思う。

久しぶりだね。そう言って抱き合う二人を眺めながら、僕は思った。

「いやあ、本当に久しぶりだ。ええ、なあ」

「うん、おじさん」

真美はそう言っつと、父さんの胸から顔を離れた。父さんも真美から離れると、うん、うん、と何度もうなずいてから、真美の顔をまじまじと見つめた。

「まさか夢でしただってことはないだろうな」

真美は首を横に振った。

「私にも分からないの。でも、夢じゃないみたい」

「そうか。うん、そうか。なに、気兼ねせずにゆっくりしていくといい」

「ありがとう、おじさん」

それは、順序を無視した、限りなく不自然なやり取りのはずだった。少なくとも、普通なら、死んだはずの人間が目の前に立っていれば、いきなり「久しぶり」とはならないはずだ。つまり、それはないだろと思ひながら、父さんと真美のやり取りが、ごく自然なことで、それが当たり前のように見えてしまっていて、さらには死んだはずの人間に「久しぶり」とこの二人と同じように言っつてしまっている僕は。

つまり、なんなのだろう？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4826a/>

---

君が還る場所

2010年10月17日02時33分発行